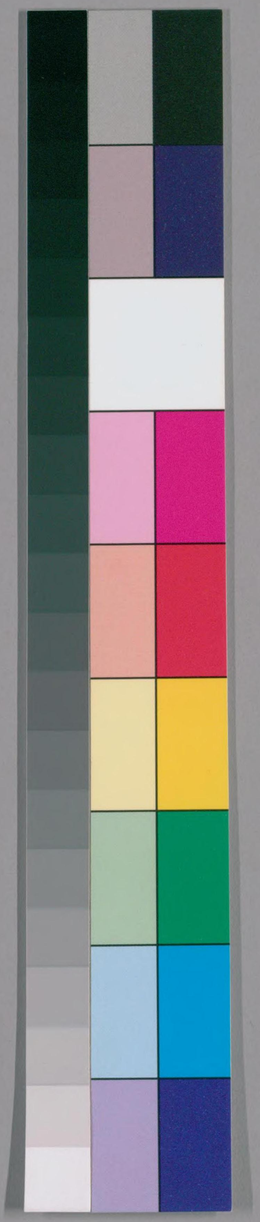


国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

第十八

共五十四巻

渡利邑

松浦氏

杜風　奇并詞ヲ以テ巻ノ名トセリ

レ女ノ君ニ六条院ハ作リソレヨリ先ニ三条院ヲ作テ花散里ウツシ玉フ六条院出来メ様花散里ハウシトラノ町ニ住玉フ

明石上ハイヌ井ノ町ト見エタリ此東院ニハ空蝉来ツフム計　侍従ハ姉トマルセ

ひんがしの院にくりなしてくさ花ちる里ときこえし

ひろさしかしこ西へ入ぬるとのなとかすてまと

司所ん家司者ハニヤ

よろ御いしなとをへ天さ海まし仕をかせ給ふ東の

多ひそかりしの御ことやおかしを気て多り小の

たいしことにひろくほくらをのてうつまても多

とおかして行すもりて祭りたの先給しへこつ

どひまむへ天さ海まるこくく志ほうつ要給へ

寝所ハ妻室ノ居ニ

つしこなりしうみ所のつくこまりなり志ん夜

源ノ休息所ん

河海説アヤマリ此上ハモトヨリ二条院ノ西ノタイニ住給ヲ

愛みて老給ひ時くわたる給ひやそこ所にして

さるかくなる御しつらひとも仕をかせ給へりあり

志ほそ御せうそこた大す今ハ多紙のかつまめへ天

事とぞの須磨と女を捨わが方のなかをとおもひしろ
かあられくやしこと（ヤンコトナキキハニサヘ源ノ貶く流リ給フトゆテ一ミテ身ノガスナラ思ヘリ）なきてたのんでたふなかく
さてのけはなれぬ所（三）ありさまの所遠なき我みつ
所ミの思ひまさるまぬべくきくをましくなるかゞるを
のおぼえなりとてつさしいぐまじらりんこれ若（素作）
君の御所もてぶきまうすならぬ力の程こそあら
まれめ玉所のまたひまたり（源ノ）ゆついで我まろこと
まく人まろ（エ）をまりしたなれましいのよあらんや
思ひそこれてを又さるまとくあられ所ま（生本）ひいぐ
うすまへられ給ぞさんもいやあられなれ（ヒ）ひさ
まうまもえうしみうむうす（入在母若）おやさちも若ふこと

前中書王
兼明親王
号雄倉云
是ニ注ノ会リ

たつまと思ひなげくまなかくしもたまたてぬ（尼ノ祖父能酬ハ子）当母
君の所ぬなち中務の家と云あるけるがら（欠）うじ行（ヒ）
ける所ぬ（大井）川のわたるまあるりける我ろれ所の
ちちかぐしうあひ所ぐ人をなくてとしはあまま
どふをとぞ（ヒ）いぞ（ヒ）のときまろ所さまつまく者をりの
屋うまてまへをよびやりてうくらふ（入在同）母中をのさ
まやさ（ヒ）たてうあられすさぬましづみそのしうやぞ
も末の世ふ（ゆゑ上源トノリ）とむ（ヒ）の事ぬまいぐきくなんさうま
みやあのすきりかとむるをまへうふまうぞゆゑ人
なの（中）いやまし多なくぬ中びよあれしちりしつ
所のなりまじ者をふる者所為ねくやなん思ひよ

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

て世中をすてたる方まくとし法ときくをこそ
ねたしぬをうのことを今こそしはしさしめんな
とりふまも大殿の世をひをうくまいまづらまし
くそそのちきのなと此ほくうけとてすれい
うさいくりけるうやうまなひようらしとき
給までのがらんをと絶うのうるもひえずなが
志まり思ひさくほくしやりのし給を後の世に
人のりひほうへん いさひとさき人まろきくまに
やとおもはをまほ大井住ナラ ほくつまいそうさ大井ノーシ申上タリ のところ
をまん思ひいぐこうとやましさをけるへ原ノ申 まじら
りんことをくるしげにのこ抱きうきく思ふや

なりやむひぬのふくらおしうらぬ仏れようぬなと
りれとおぼしなりぬ惟光物臣まぬの思ぬるみち
きいけとなくいろいほのうまつろ人なれを御り
おして大井ノ あるへ手さ海まあしのようぬなと
せさ愛語ふなるをあきおりしうて海ほくまかよひ
こう所のさ海まるん給けるとまきまほ原内やうの
すさぬまよしなりうすきまぬへしとおかを御く
らをぬ御なりを大かくちの面まあるまく御殿の
ひまへなとをとうひおもしろきてくなりあまを
川つうまもいまぬ松ゆまのいこいまも
なくさそこうしん殿のことそうぶるさ海もなの

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

うしゐ（上リタク思ヒシ人モ下ノ京ヲ見ル）人くのいふせう思ひしづミ給ふ事う
れしき事のうつ見まて見ぬ事はなのまさこ（ま）ま
きこしもう思らしりしとよすらなきまうつく袖
ぬれがちなり秋の法をひなれハこのあれとも
うさ（ほ）ゆるしちしてうの日とあれあり給ふ秋
風すゞしきてせしの事もやりあへぬようこのう
きをみいでしてぬさるまゝ入道ねぬのさ（ほ）ゆるまゝ
うつ起きてこれすゞきうらしておこすひぬまし
ありいみじうこといみすれとこれもしくいや思
かこしわう（ぶ）君をいとゝくうつくしげにふ（兵光珠）ひう
ゆ楽ん玉のしちして袖よりありまゝまちきこえ

さゝつ事をこれはくまつりし給へ事ゆさ海なと
拵くしまゝまでうくんうしさが（ヒカモノニハ別法ヲモイマ）ゆ道れ方をいさ
しきとあるゝ事を呵みなしてきいりぞりまぐさん
とすらんと給ふこあへ事
（入道）ゆされをはうりいれろわうきちよそへぬき（カンニンナラヌトニヤ）
老のなみこなりなりいとゝゆくしやとくをしの
こひ（退）ひ（深）くす居きを
（尼去）りろとりに都をいぐ事これさびやひとつの中（聖）
（野中ノ道ハ清水ノアル所ヲ云ニヤ）
入みちまきどうんとて注給ふさ海いとこと
なりあくらち事かいしてほきりぬるとし月の
ほとを思へハ（深ノ心ノウチタルヲ思ヘリ）うう事ゆるあと我身のこてまて

しきなりへ　おもひ思へてたりましやはこく
明いそイ
いまさへ入たこ宮ゝんてハイカトトし
ひみんことをいかせそうさるもも
たらぬ世紙をたのまんをくつまゝとちらはの
入たこシクリ伝ヘトゆんとノ玉フ
給へどうくしうほまくしさるまじ気よしを
いひほく而まうがに色のをやをいやうしろめたくなる
是ヨリ入たノムスメニ詫侍ルフ也我才をシステタリシカ悩テ侍ニ故テカルスマサシセモ只女去独ノアシ思なき故
但ハテ、新くきりしきなり帯をまてはしめしはつれ人の
ノホサント思侍シカ尼フル交代ノシツメル数ニテハ新大臣ノナキ詫シハツカシメンコトシ思テ世ラステニヨキ首途ト
思ヒ侍シニ
くすく思ひくるを待しましもとく思の所ためと
ムスメ
しかケスフノイテマウテキメルセナカくトカタリ侍セ
思ふやうにあるくれの所ゝしほ気もむまうなふ
やうりやと思ふへさらしうどかれ所ゝなるまけ
交代ナレハナリ
おきさの思しおくまし　おなるしかぞさらは
都はのへるてふるすらうのしつめるたぐひまく

まづしき家のよもきむぐらのとのうりさ後ろ
多むることなれ掛し　おわやまさくしまれ
ちがましまゐをひろめて　おやの所なれが事をも
ほしめんことれいみじさになんやがく世紙を
てつ気うやでなりやうや人をしられましを
其脱ハヨキト思シ
のくまほきくをらう思ちなちそうると思ひ侍
能
おほ思のやうくおとすひ浜ひ物おりなしさなべき
四ス上ノシトナヒ所ラ見テ為中ニアラシハ入たノヘツヤミノ東ノ錦ト思侍セ　ツヤミハ子ヲ思たラ云リ
おうつくをなどうはおしきせうひまくうしき
ヨルノ錦
をかくしやの面らんとしのやミまれさなくなぎ気
まとり侍しまくに佛神をたのミやしてさるとと
うほるなれ方はひかれく山がけのいをるまうを

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

のあそんのこゝろにかかりつゝひさらとくれぬ
かいくゝ成ぬんなといふ所ふそ殿にとて
そなるさゝ海(ミタウニセ)にはしましぬにいかにあらしと
さらにさてうりひとゝりしさらにあ所の所につり
おほしいくらう聖にまゐらぬる志さらことゝ志
おほしいりひ気所をさらをさらおほかのえこなと同せ
ましてさいまりおほみきあ所さくひまむなりまし
て川の所なるもやうけなれとそひに所きれさに
りしましくしつをのしく絶句なとつくりわく
して月花やうにさしいつる程におほみあうひりし
まるとていせ今めりしき日き物ひまはしあまりの望

延本元十月十八日小弓ヲ菊ノ枝ニ付テ有リシ例アリ

川乃急碎中危トシ

詩作ニ成名ヲ

汚拙ノイ

次上ノイ十九ヘシ

絶ヒ上手のうきなしておほなにあひたるてうし
喚さつ程をせ川風喚あしせておもしろきに月た
かくさしあがるまゝろ津のことをめる夜のやくぬ
くらほとに殿上人四又人をうりまゐてまゐまゐ
うゐにあふひけるおほあうひあるけるほゐて
まゐふ今日の所掛いみあくふ日まてかるすす
所いつも行色き紙いりなれをとおほをられけまを
あくにとさらを絶にけるよしきこしめして所せう
うこまなりけり所使を藤人の弁なりけり
冷月のまむかきのをちまる里まれそのつゝの新
色のせきうるらんうゝやましうとありしこそ

大内

イツミテモ六日物忌十九ヘシ天一神六日ツクミヤ

勅言

冷ノ

冷

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

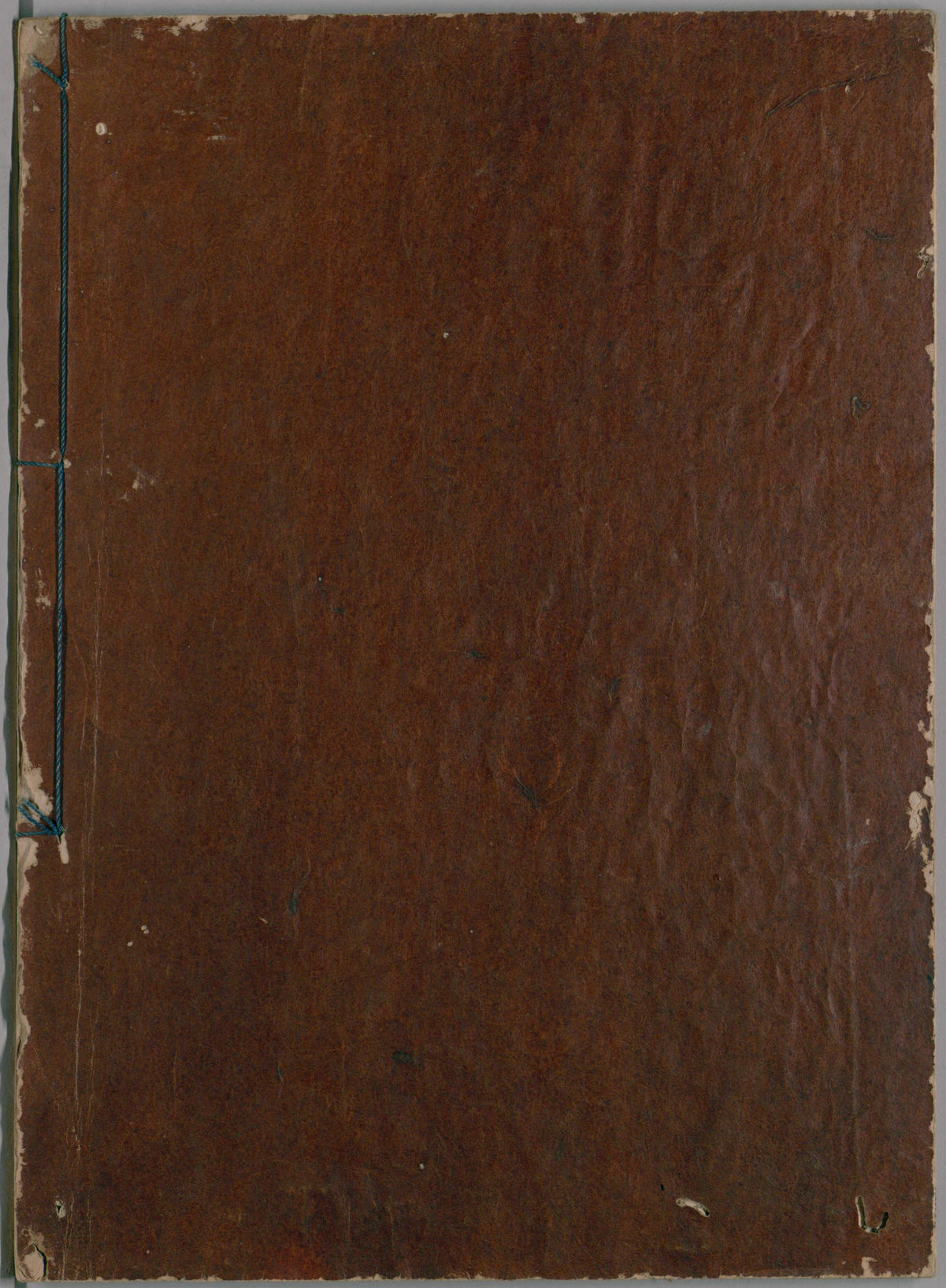
国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

国立国会図書館

国立国会図書館　　タイトル『[源氏物語] 54巻』　請求記号

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用